【2015年度】

左：6月「公開報告会」　　右：5月　再生活動

植生回復へマット設置　三嶺山域

高知の最高峰、三嶺（1894㍍、香美市物部町など）山域でこのほど、シカの食害を防ぎ、裸地化した場所の植生回復へ向けた活動が行われた＝写真。

三嶺から白髪山へと連なる尾根筋にあるカヤハゲでは、一面に広がったササ原が食べ尽くされて土壌がむき出しとなったため、これまでにも土砂流出防止マットを設置してきた。ススキが育ち始める被害が広がる中、三嶺山域でも2007年ごろに食害が顕在化。「三嶺の森をまもるみんなの会」（依光良三会長）はこを中心に敷くことにし高知中部森林管理署と協力して、森の再生に取り組んでいる。

草や樹皮が食べられ、土壌が流れて木々が倒れ復へ向けた活動が行われ

ボランティアら約80人は、登山道を1時間半ほど歩いてカヤハゲに到着。ヤシ繊維のマットを広げて覆い、波打つ表土と隙間ができないようにくいで打ち付けていった。また、各地で防鹿ネットの補修も実施してきた。スギが育ち始めた。

中腹の樹林帯にあるさおりが原では、保護柵の中でケヤキの稚樹が多く見られた。依光会長は、それらの苗の植樹も考えているという。

（市川　亨）

記事11月
（写真は8月
現地案内）

シカ食害「依然深刻」

専門家ら三嶺現状など報告　高知市

【香長】香美市の三嶺山系などのニホンジカ食害について考える報告会がこのほど、高知市丸ノ内1丁目の四国森林管理局で開かれた。約60人が参加し、「被害は依然として深刻」とする現状や、今後の対策への理解を深めた。

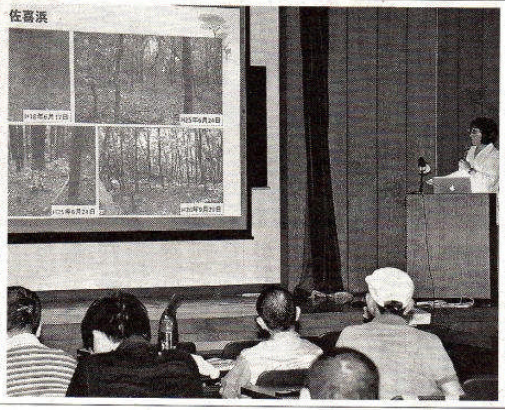
三嶺の食害防止や植生保護に取り組む「三嶺の森をまもるみんなの会」（依光良三代表）の主催で8回目。

報告会は7人が登壇し、徳島県西部総合県民局が剣山の食害に関するワークショップを紹介したほか、高知県鳥獣対策課が県のシカ対策などを説明した。

県内のシカ捕獲頭数は年々増え、2013年度は約1万9千頭。農林業被害は約1億3千万円に上る。昨年11月の三嶺での捕獲事業は陸上自衛隊や登山者らの協力もあり、4頭捕獲。県担当者は「険しい山岳地での捕獲の困難さと共に捕獲の必要性を認識した」と話した。

香美市産業振興課は昨年度のシカ個体数調整事業を報告。捕獲実績は7日間で計66頭に上った。今後の捕獲については「目撃情報が重要」「登山者や作業者に情報提供を呼び掛けている」と述べた。

このほか、県立牧野植物園の前田綾子研究員が「高知県東部・中



ニホンジカの食害について考えた報告会（高知市丸ノ内1丁目）

三嶺の森をまもるみんなの会　再生向け保護と啓発

シカ食害の啓発や植生保護を続ける「三嶺の森をまもるみんなの会」の依光良三代表＝左（香美市物部町）

【香長】シカ食害が深刻な香美市の三嶺山系。被害の現状を訴え、再生に向けた保護に取り組むのが「三嶺の森をまもるみんなの会」（依光良三代表）だ。

2007年に依光代表が山を訪れた際、尾根のササが枯れ、樹皮が剥がされるなど数千本が被害を受けていた。「全てシカの仕業。急いで対策を講じなければ」。すぐに民間の環境保全団体で連携し、「まもる会」を立ち上げた。

設立から8年。これまで保護柵の設置や現地調査のほか、シンポジウムや写真展などで啓発も行ってきた。地道な活動が実り、植生が回復に向かい始めた場所もある。行政や農林業、漁業関係者など、活動に加わる人々も増えた。

「地域を巻き込み、活動を広げていけたら」と依光代表。来年1月にシンポジウムを予定している。

（馬場　隼）

1月
写真パネル
展

シカの食害 森どう守る　香美市役所でパネル展

高知、徳島県境の三嶺（1893㍍）周辺の自然林の保護活動を続けている市民団体の写真パネル展が香美市役所1階ロビーで開かれている。シカの食害で傷んだ樹木や下草が失われた森の様子を約100枚の写真で紹介している。20日まで。

県内の自然保護団体や物部川流域の諸団体でつくる「三嶺の森をまもるみんなの会」主催。2007年に設立され、写真展やシンポジウムを通じた啓発活動や、シカの被害を防ぐ保護柵の設置などを続けている。

約40枚のパネルにまとめられた写真は、ここ10年ほどの植生の変化や土砂流出が懸念される森の現状を生々しく伝えている。23日午後1時15分から午後4時半まで、香美市立中央公民館で「どう守る三嶺・剣山系の森と水と土」と題したシンポジウムも開かれる。

代表の依光良三さんは「近年の管理捕獲でシカの生息密度は下がり、新たな食害は減ったが、いったん進んだ自然林の荒廃は増すばかり。シンポジウムでは今後の活動のあり方を行政を含む多くの人と議論したい」と話している。

問い合わせは依光さん（0887・56・2366）へ。

（長田豊）

三嶺のシカ食害を伝える写真パネル展＝香美市役所

上：10月

右：11月

山肌にマットを張る参加者

数年後の植生回復期待

三嶺山系・カヤハゲのシカ食害

マット敷設 3年目で網羅

香美市

【香長】香美市物部町の三嶺山系・カヤハゲ（標高1720㍍）でこのほど、シカの食害でむき出しになった山肌に、土砂流出を防ぐマットの敷設作業が行われた。3年目の今回で、裸地化していた計5千平方㍍超をほぼカバーし、数年後には植生の回復が期待できるという。

三嶺では2007年ごろから食害が顕在化し、南方のカヤハゲ周辺でもササが枯れて一部が裸地化。シカ防護柵を設けても植物が根付かず、一昨年から「三嶺の森をまもるみんなの会」と高知中部森林管理署が、土の流出を防ぐマットの敷設を進めてきた。

マットはヤシの繊維ででき、くいで固定。「一昨年に敷いた場所は、たまった土砂にススキの種が定着して腰の高さほどまで伸び、「確実な効果」（同会事務局の坂本彰さん）が確認されている。

ボランティアも含めて約80人が参加。登山道を1時間半ほど歩いて現場に向かい、残っている裸地約千平方㍍にマットを固定していった。初参加の春野高校3年、門田涼平さん(18)は「山に興味があり、進学して林業を学びたい。斜面にマットを敷くのは大変でしたが、やりがいを感じた」と汗を拭っていた。

坂本さんは「カヤハゲは徳島県側を除くとほぼ手を打てた。植生回復へ、別の方策も考えていきたい」と話していた。

（小笠原敏浩）

（第３種郵便物認可）

2016/11/24

高

三嶺シカ食害 植生回復へ

香美市でシンポ 土壌流出は深刻

【香長】香美市の三嶺山系のシカ食害について考えるシンポジウム「どう守る三嶺・剣山系の森と水と土」が23日、同市土佐山田町の中央公民館で開かれた。被害が減少し、植生が回復しつつある一方、依然続く原生林や土壌への被害、捕獲事業に関する課題や対策などが報告された。

三嶺山系のシカ食害について考えたシンポジウム（香美市土佐山田町の中央公民館）

食害防止や植生保護に取り組む「三嶺の森をまもるみんなの会」（依光良三代表）の主催で9回目。

冒頭、依光代表が白髪山と、三嶺中腹の「さおりが原」の変化について説明。特に被害が激しかった2007年～12年に比べ、13年から樹皮食いなどの被害が減少し、尾根のササや保護柵内のスズタケなどが再生に向かっていることが示された。依光代表は「11年に本格化した管理捕獲の結果」としつつ、樹木群の枯死や土壌流出がいまだ深刻であることも訴えた。

森林総合研究所四国支所の奥村栄朗・野生動物害担当チーム長は、全国的な傾向として「(シカの)個体数の増加に、捕獲が追い付いていない」と指摘。今後に向けて、新しい捕獲技術の研究や導入▽個体管理のための専門的な知識や技術を持った技術者集団や地元狩猟者の育成―などの課題を挙げた。

このほか、高知大学理学部の石川慎吾教授が植生保護マットの設置効果について報告。香美市産業振興課が市の管理捕獲実績、県鳥獣対策課が野生鳥獣の保護管理とその担い手の確保について話した。

（馬場 隼）

【2016年度】　環境教育協力　5月

シカ食害の山に植樹

小中生 ブナなど60本

香美市

シカの食害にあった山に苗を植え、周りをネットで囲った（香美市物部町）

【香長】シカの食害で荒廃した山に緑を取り戻そうと、香美市の小中学生らでつくる「香美市こどもエコクラブ」が8日、同市物部町の三嶺山系「みやびの丘」で植樹活動を行い、自然の復活を願った。

同クラブは4年前から「みやびの丘ブナの森づくりプロジェクト」と題して、植樹や木々の周りにネットを張るなどの活動を続けている。

この日は同市の舟入、香長両小学校と鏡野中学校の児童生徒ら26人が参加。三嶺山系の保全に取り組む「三嶺の森をまもるみんなの会」（依光良三会長）のメンバーや保護者らと協力しながら、新たにブナとミズナラの苗を60本植えた。苗の状態でシカに食べられてしまわないようにと、一本一本の周りをネットで囲った。

初めて植樹に参加した舟入小3年の別役はるかさん（8）は「シカが食べた森を直したい。また来た時どうなっちゅうか楽しみです」と話していた。

（楠瀬健太）

シカによって荒廃した山での植樹活動（香美市物部町の三嶺山系「みやびの丘」）

シカ食害から三嶺守れ

香美市

21日に柵設置 参加者募集

【香長】「三嶺の森をまもるみんなの会」（依光良三会長）と高知中部森林管理署は21日、香美市物部町の三嶺山系「さおりが原」で、シカ食害から植物を守る防鹿柵を設置するボランティアを募集している。

さおりが原では2006年ごろから、マネキグサやササなどが食害に遭い、同会は08年から防鹿柵の設置などを続けている。現在、柵の外には植物がほとんど残っていない状態で、根を張って土を支えるササが枯れたことで、周辺では土砂崩れも深刻になっているという。依光会長は「物部川源流の原生的な山が壊れている。皆さんの協力で再生していきたい」と話している。

今回は植樹も含めて作業を行う。定員80人で、当日午前7時20分から、同市大栃の奥物部ふれあいプラザで開会式と班分け。1時間半ほど山歩きが必要で昼食や軍手、登山用の靴は各自で用意する。

高知、南国、香南、香美の各市から無料送迎バスを運行する。雨天の場合は22日に延期。申し込みは15日まで。問い合わせは同会事務局（0888・850・0102）

（楠瀬健太）

5月
保全・再生活動

シカ食害の山 再生を

香美市 ボランティアが植樹

【香長】シカの食害で荒廃した山を元に戻そうと、ボランティアの大学生らがこのほど、香美市物部町の三嶺山系「さおりが原」で植樹やシカ対策のネット張りを行った。

三嶺の森をまもるみんなの会（依光良三代表）と高知中部森林管理署が主催。ボランティアによる活動は今年で10年目で、高知大や高知工科大の学生も含めて約170人が参加した。

さおりが原はかつて、ササがうっそうと生い茂る原生林だったが、2006年ごろからシカの食害に遭い始めた。現在はほとんどの場所が裸地化し、周辺では土砂崩れも深刻になっている。

参加者はグループに分かれ、食害に遭っていない木々の周辺など約6千平方㍍をシカの侵入を防ぐ防鹿柵で囲った。木から種が落ち、裸地化した場所に樹木が回復することを狙う。また、ブナやトチなどの苗も約100本植樹した。

シカの食害を受けた山にボランティアが防鹿柵を設置した（香美市物部町の三嶺山系「さおりが原」）

今回初めて参加した高岡郡日高村下分の会社員、西森正実さん（43）は「トレッキングが好きですが、山の実態を知り、遊んでいるだけでなくこういう活動もしないといけないと思った」と話していた。

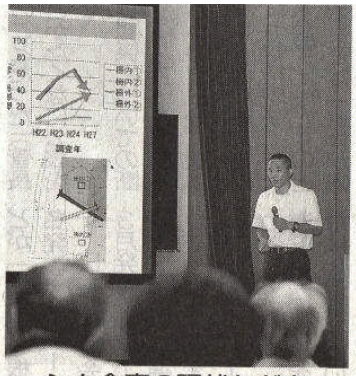
（楠瀬健太）

6月「公開報告会」

8月写真展と寄附付き商品販売の協力をいただく

シカ食害 防護柵が効果

三嶺、剣山周辺の調査報告 高知市



シカ食害の現状などを説明した報告会（高知市丸ノ内1丁目）

【香長】三嶺山系や剣山系で深刻化するシカの食害被害について、公開報告会がこのほど、高知市丸ノ内1丁目で開かれ、約50人が山の現状に理解を深めた。

研究者や香美市の職員ら6人が登壇。三嶺や剣山に加えて嶺北地域でも被害が広がっているとし、ササなどが食べ尽くされて荒廃した山の様子などをスライドで紹介した。

西日本科学技術研究所の担当者は、食害から植物を守る防護柵の効果について、2010年から実施している調査の結果を発表。三嶺や石立山では柵の外に比べて内側の方が、植物の繁茂状況を示す「植被率」が上がっているとし、立地条件によって差はあるものの「防護柵の設置が、植生の保護に大きく寄与している」と述べた。

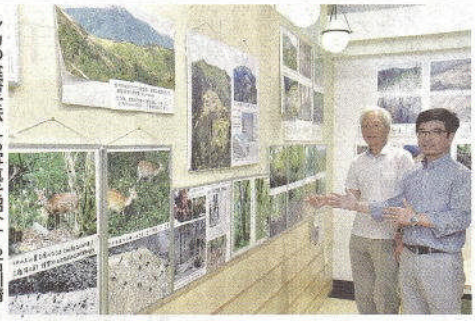
高知大学理学部の比嘉基紀助教授は、本県でのシカの個体数管理は、専門的な捕獲技術者ではなく一般の狩猟者に依存していると説明。県内の狩猟者は80%以上が50歳を超え、今後急速に少なくなる可能性を指摘した。

報告会は、山の植生回復に取り組む「三嶺の森をまもるみんなの会」（依光良三代表）が主催し、9回目。

（楠瀬健太）

（第3種郵便物認可）

シカ食害から森守れ



シカの食害を伝える写真を紹介する石川靖社長＝右＝と依光良三代表（写真はいずれも香美市土佐山田町の「バリューノア」）

香美市のスーパー 寄付付き商品販売

寄付の対象となる商品

【香長】香美市土佐山田町でスーパー「バリュー」を経営する土佐山田ショッピングセンター（石川靖社長）が、同市物部町の三嶺のシカ食害を市民らに啓発する取り組みを始めた。来月11日まで、荒廃した森の写真を店舗に展示し、対象商品の売上金の一部を森林の保護活動をする団体に寄付する。石川社長（47）は「身近な自然の現状をもっと知ってほしい」と呼び掛けている。（楠瀬健太）

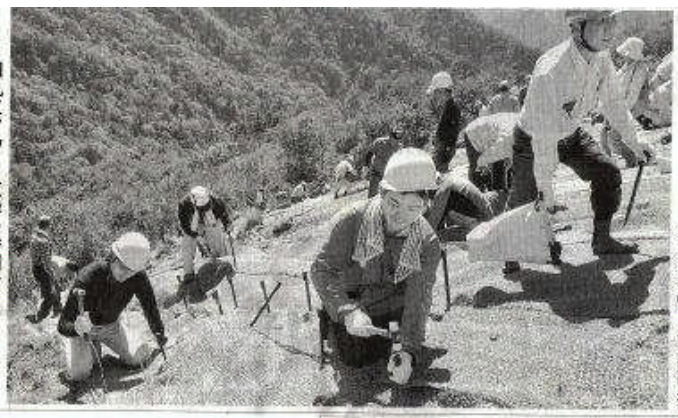
石川社長は、今年1月1～3店に、依光代表から借りた食害に遭う前後の山の写真や、「香美市こどもエコクラブ」が作った壁新聞を展示した。

また各店の商品品を対象に、1品の売上金から1円を「一みんなの森」の依光良三代表の講演を聞いた。

シカ食害や荒廃した山の深刻な状況を知った石川社長は「一みんなの会」に寄付する活動も始めた。対象商品には、鹿肉のソーセージや有機農法の野菜、化学調味料を使っていない総菜などが選ばれている。

土佐山田町出身の石川社長は身近な山の荒廃が「ショックだった」とし、「地元の自然を守りたい、支援したいという人を巻き込めれば」。依光代表は「一般の人の目に付きやすいスーパーで食害の写真を展示ができるのはありがたい。山の被害を啓発したい」と話している。

10月　保全・再生活動



山肌にマットを張る参加者

数年後の植生回復期待

三嶺山系・カヤハゲのシカ食害

マット敷設 3年目で網羅

香美市

【香長】香美市物部町の三嶺山系・カヤハゲ（標高1720㍍）でこのほど、シカの食害でむき出しになった山肌に、土砂流出を防ぐマットの敷設作業が行われた。3年目の今回で、裸地化していた計5千平方㍍超をほぼカバーし、数年後には植生の回復が期待できるという。

三嶺では2007年ごろから食害が顕在化し、南方のカヤハゲ周辺でもササが枯れて一部が裸地化。シカ防護柵を設けても植物が根付かず、一昨年から「三嶺の森をまもるみんなの会」と高知中部森林管理署が、土の流出を防ぐマットの敷設を進めてきた。

マットはヤシの繊維ででき、くいで固定。一昨年に敷いた場所は、たまった土砂にスギの種が定着して腰の高さほどまで伸び、「確実な効果」（同会事務局の坂本彰さん）が確認されている。

ボランティアも含めて約80人が参加。登山道を1時間半ほど歩いて現場に向かい、残っている裸地約千平方㍍にマットを固定していった。初参加の春野高校3年、門田涼平さん（18）は「山に興味があり、進学して林業を学びたい。斜面にマットを敷くのは大変でしたが、やりがいを感じた」と汗を拭っていた。

坂本さんは「カヤハゲは徳島県側を除くとほぼ手を打てた。植生回復へ、別の方策も考えていきたい」と話していた。

（小笠原敏浩）

右：香美市役所での
写真パネル展
（1月）

下：特集記事（1月）

シカの食害知って

香美市役所で写真展 26日まで

【香長】香美市物部町の三嶺山系で深刻化するシカ食害を啓発する写真パネル展が、香美市役所の1階ロビーで開かれている。荒廃した山の様子や植生回復の状況などを知ることができる。26日正午まで。

住民有志らでつくる「三嶺の森をまもるみんなの会」（依光良三代表）の主催。白髪山や三嶺山系のさおりが原で植物が食害に遭い、地面がむき出しになった様子や、その影響で起きた土砂崩れ被害などを撮った約190枚を展示する。

同会メンバーらによる防鹿柵の設置などで緑が回復した状況も紹介し、依光代表は「食害で自然がどれだけ急激に変化したかを知ってほしい」と話している。（楠瀬健太）

シカの食害を紹介する写真パネル展

28日シンポ

三嶺の森をまもるみんなの会は28日午後1時15分～4時半、香美市土佐山田町の中央公民館で、シカ食害対策を考えるシンポジウムを開く。

四国森林管理局や高知県、香美市の職員らが登壇し、シカの捕獲状況や土壌浸食などについて講演する。問い合わせは、依光代表（0887・56・2366）へ。

高知新聞

シカ食害対策 10年で成果

三嶺守る「みんなの会」

専門家集団 緑再生けん引

シカ食害が深刻化している香美市の三嶺山系で、植生の保護・回復などに取り組む「三嶺の森をまもるみんなの会」が発足10年を迎えた。山のエキスパートたちが集まる環境団体は、活発なフィールドワークと啓発活動で県内の食害対策をけん引。さおりが原を中心に進めてきたネット柵の設置などでは、成果も表れ始めている。（香長総局・楠瀬健太）

■危機感

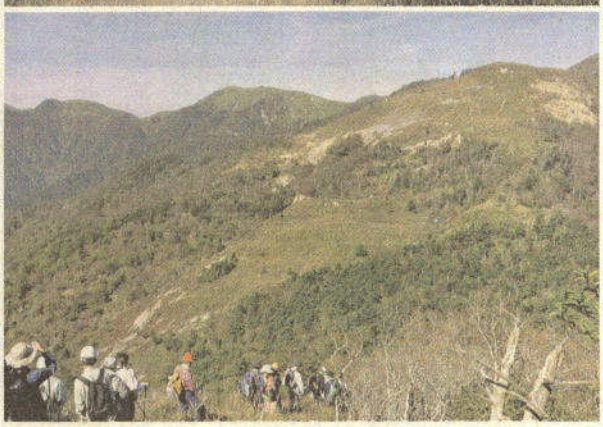
「シカの捕獲もだんだん増え、植生回復も進んでいるが、まだ課題は多い。気を緩めず取り組みたい」

1月28日、香美市で開かれた「みんなの会」の活動報告シンポジウム。10回目の節目を迎え、代表の依光良三さん（75）が決意を新たにした。

「三嶺を守る会」など物部川流域の環境団体九つで発足した。背景にあった一つが、この直前に初めて官民が三嶺全域で行ったシカの食害被害調査だ。

会副代表を務める坂本彰さん（68）によると、それまでも登山者から被害は断片的に報告されていたが、樹皮が剥がされて枯れた木、下草が食われてむき出しになった山肌など「変わり果てた山が明らかになった。大変なことだと、危機感が生まれた」。

対応には幅広い知識も必要だった。県立牧野植物園や森林総合研究所四国支所、各大学などにも呼びかけ、植物やシカの生態に詳しい専門家たちが集まったのが「みんなの会」だ。



（上）シカの食害によって灰色の地面がむき出しになった三嶺南方のカヤハゲ（2009年5月、香美市の三嶺山系＝「みんなの会」提供）（下）同じカヤハゲの昨年10月の様子。灰色だった部分に緑が戻りつつある

■緊急避難

会が進めてきた植生回復の取り組みで、成果も表れてきている。

会は「現場」活動を重視。植生保護へ、植物を囲うネット柵を設けたり、裸地化した部分の土壌流出を防ぐシートを敷設したりしてきた。月1回の定例会で情報交換を行うほか、県内各地のイベントで写真展を開いたり、シンポジウムを開いたりと食害の啓発に努めている。

香美市の担当者は「植生回復は専門的な知識が必要なので、行政単独ではできない。被害状況をしっかり調査し、対策を提案するみんなの会の存在は大きい」と評価する。

ネット柵はこれまでに約60カ所（総延長約8キロ）で設置。会のメンバーでもある石川慎吾・高知大学教授（64）＝植物生態学＝によると、柵の内側では確実に回復傾向が見られ、夏場は緑で地面が見えないほど回復した場所もある。県のレッドリストで絶滅危惧種に指定されているマネキグサなど、希少植物の復活も確認された。

予算的な制約などでネット柵を設置できたのは“被災地”の一部にすぎないが、「小さなエリアでも、緊急避難的に多くの種を囲うことで、シカの数が減った時に柵の中から外へ植生が回復する」と強調。この10年で「もともとあった種をかなり保全できたのは間違いない」と自負する。

また、裸地化した場所の土砂流出を防ぐシート敷設は、この3年間で約5千平方㍍を実施。1年目に敷いた場所では、定着した土砂でススキが育ち始めており、副代表の坂本さんは「確実に効果がある」と話す。

■広がる裾野

県鳥獣対策課によると、県内のシカ捕獲頭数は07年度の4710頭から15年度は2万556頭に増加。依光さんは「シカが減ったことやネット柵などの設置で、日当たりの良い三嶺や白髪山の稜線部は、ササやススキがほぼ問題ない水準まで回復してきた」と総括する。

一方、稜線部以外にはなお、シカの食害により地面がむき出し状態の場所が多い点も指摘。「本来の自然を取り戻すまでには、何十年もかかる話」と、息の長い取り組みの必要性を訴える。

その中で依光さんが「心強い」と評するのが裾野の広がりだ。

昨年5月。三嶺山系のさおりが原で「みんなの会」主催のネット張りが行われ、約170人が汗を流した。初参加の高岡郡日高村の男性（44）は「趣味は山歩き。山に関心があって今回参加した。よみがえろうとしている森を見ることができた」と顔を崩した。

会が一般ボランティアを募って行う現場での活動は10年で27回、延べ3千人超に上り、特に近年は、日高村の男性のようなケースのほか、地元JAや市町村役場の職員、大学生、高校生ら参加者の裾野が広がっている。

依光さんは「山に初めて入る人は、途中で土砂崩れが起きていても、それが普通だと思うかもしれない。これからも写真展や保護活動を通じて山の現状を多くの人に伝え、植樹などできる活動をしていきたい」。次の10年に向け、意気込みを語っている。

支局「発！」ニュース深掘り

【2017年度】

（第３種郵便物認可）　高　知

シカ食害の実態知って

三嶺守る「みんなの会」

結成10年記念し啓発冊子

【香長】香美市の三嶺山系で深刻化しているシカの食害を啓発する冊子を、山の自然回復に取り組む「三嶺の森をまもるみんなの会」（依光良三代表）がこのほど出版した。県内外に食害の実態を広めようと、会の結成10周年を機に2千部作製した。

食害は2000年前後に兆候が見え始め、06年ごろから深刻化。三嶺や白髪山、さおりが原などで原生林が被害に遭い、希少植物の減少や、土壌が保水力を失ったことによる土砂崩れの問題が起きている。

みんなの会は登山愛好家や大学の研究者、行政による「緩やかなネットワーク組織」として07年に発足。植物をシカから守るネット柵の設置、シンポジウムを通じた啓発活動などを行っている。

冊子は「シカ食害で痛む三嶺の森―再生への途と課題―」と題し、A4判105㌻。写真をふんだんに使い、樹皮が食べられて枯れた木々、崩れた山肌などを、食害の前後で比較しながら紹介している。シカが急増したメカニズムや、みんなの会の活動とシカの捕獲による植生回復の現状も解説している。

依光代表は「四国山地全体や全国で三嶺のような被害が起きないよう、県内外の人たちに実態を知ってもらいたい」と話している。

冊子は900円（税別）。金高堂書店やみんなの会のシンポジウムで販売する。（楠瀬健太）

完成した冊子を持つ三嶺の森をまもるみんなの会の依光良三代表（香南市野市町西野）

上：5月

右：5月
（再生活動）

シカ食害から緑守れ

香美市　三嶺にネット柵設置

【香長】シカの食害で荒廃した山に植物を取り戻そうと20日、香美市物部町の三嶺山系「さおりが原」周辺で、市内外のボランティア120人が食害から植物を守るネット柵を設置した。

「三嶺の森をまもるみんなの会」（依光良三代表）と高知中部森林管理署が主催し、毎年実施している。登山愛好家や大学生、香美市の職員らがボランティアとして参加した。

さおりが原周辺はかつて、地面にササが生い茂る原生林だったが、2006年ごろから食害が深刻化。希少植物の減少や、土壌が保水力を失ったことによる土砂崩れの問題が起きている。

今回は、さおりが原から300㍍ほど上がった傾斜地などで計435㍍のネット柵を設置した。柵で囲まれた場所はシカが入れないため、木から落ちたり、風で飛んできたりした種から植物が育つという。

ボランティアは、みんなの会のメンバーらから指導を受け、手際よく柵を張っていた。初参加した高知大学大学院の松原萌さん(25)は「何年か後に、どんなふうに自然が回復しているか見に来たい」と話していた。（南頼健太）

シカ食害防止のネット柵を張るボランティアたち（香美市物部町）

８月

三嶺保護に役立てて

香美市のスーパー 売り上げ一部寄付

寄付金を受け取る依光良三代表
（香美市土佐山田町栄町）

【香長】香美市土佐山田町でスーパー「バリュー」を展開する土佐山田ショッピングセンター（石川靖社長）は30日、全3店舗で約1カ月半販売していた寄付付き商品の売り上げの一部、27万291円を、物部川源流域で広がるシカ食害の啓発に取り組む「三嶺の森をまもるみんなの会」（依光良三代表）に寄付した。

昨年に続き2回目。6月15日～7月31日の間、食料品など200品を対象に、1品の売り上げにつき1円を寄付に回した。うち2店舗では、食害で荒廃した山の様子やみんなの会の活動を紹介するパネル展示も行った。

贈呈式はバリューノア店で行われ、石川社長が依光代表に目録を手渡した。みんなの会は寄付を主に、同市のこどもエコクラブが植樹活動などをする際の送迎バス代に充てるという。

依光代表は「大変ありがたい。物部川流域の人々が山の被害に関心を持って協力してくれてうれしい」と話していた。

（楠瀬健太）

９月末

再生活動
（稜線部
徳島側）

三嶺の植生回復へ
160人がマット敷き

裸地化場所ほぼカバー

マット敷設を行うボランティアたち
（香美市物部町）

【香長】香美市物部町の三嶺山系・カヤハゲ（標高1720メートル）で24日、シカの食害により山肌がむき出しになった部分に、土砂流出を防ぐマットを敷く作業が行われた。ボランティアの高校生らが緑の回復を願い汗を流した。

三嶺の南方に位置するカヤハゲはかつて、ササの群生地だったが、2007年ごろから食害が深刻化。「三嶺の森をまもるみんなの会」と高知中部森林管理署がシカの侵入を防ぐネット柵を設置してきたものの、裸地化した場所は土砂が崩れて植物が定着せず、14年からマットを敷き始めた。現在は食害に強いススキを中心に、植生の回復が見られている。

今回は徳島県との県境付近で約2千平方メートルの範囲にわたり、ヤシの繊維でできたマットを敷設。急斜面での作業に苦戦しながら、マットをくいで固定していった。この日は、三嶺山系・みやびの丘（同1558メートル）でもネット柵の設置が行われ、ボランティアは2カ所で計160人に上った。

マットの敷設に参加した高知農業高校3年の山脇月（ゆえ）さん（18）は「きつかったけど、達成感があります。失われた植生が戻ってほしい」。今回の作業で裸地化した部分はほぼカバーできたといい、みんなの会事務局の坂本彰さん（68）は「これから自然の力で、元のササ原に戻ってくれれば」と期待している。

（楠瀬健太）